

「これを読まずして年は超えられないで」 賞ノミネート作品紹介その

The Pillars of the Earth

ピアレスゆかり

※Sara Midda's South of France - A Sketchbook by Sara Midda

Sara Midda は日本でもファンの多いイラストレーターですが、この本は彼女が南仏を旅した時のスケッチや散文が盛りだくさん。既刊の "In and out of the garden" と同じような装丁になっているのが心憎い。カバーから本体、ページの隅々までどこを開いても楽しめるくらいデザインが考慮されていて、こういう本が本棚にあると、ウキウキしてしまう小さな芸術品だと思います。（アートにはお値段も手軽）

※When the Night Doth Meet the Noon (Poems by John Keats)

Keatsの詩は有名ですが、この本はKeatsが詩作した時代と同じ頃のロマン主義を中心とした画家たち、TurnerやConstableなどが描いた風景や人物（Keatsの肖像画もあります）と詩を見開きで鑑賞できるように構成された「文学・絵画館」のような本です。

※Wisdom, Madness and Folly by R. D. Laing

訳本では「わが半生」という、R. D. Laingが自身の半生を綴った作品。人の心の絡まり（狂気）を詩のように描いた「結ばれ (Knots)」は常に読み返したくなるほどですが、それを生み出した彼の育成歴は？という疑問から大いに遅れ馳せて読んでみました。自分の中に自然に存在する狂気を無意識に語っているような、こんな自叙伝もあるのだ、と感じる作品です。

Blink By Malcolm Gladwell

Outliersで大人気、そして今秋にはWhat the dog sawという過去の記事を

まとめたエッセイ集も売っているMalcolm Gladwellのこれは2冊目の著書です。

Blinkとは瞬きをするような一瞬のことですが、この本は、人間の瞬間のカン、そし

て

その時にどのような判断を下すのか、そしてそんなごく一瞬に下した決断が正しい場合と

間違っている場合について詳しく解説しています。彫刻などの美術品の贋作を一目で見破るプロや、

罪の無い一市民を一瞬の勘違いで射殺してしまった警官のエピソードなど、

彼独特のユーモアあふれる、フレンドリーな文体で、つつい引き込まれてしまいます。

ノンフィクションですが、堅苦しくなく、とても興味深い本です。

If you are engulfed in flames By David Sedaris

私はカナダに住んでいることと、普段全くと言って良いほどラジオを聴かないのでNPRでは知らない人は居ないというほど有名なDavid Sedarisのことは殆ど知りませんでした。ですがこのエッセイ集、友だちに「絶対面白いから」と薦められて読み出し、あっという間に読み終えてしまいました。エッセイなので気合を入れずにさくさく読めるのが良いし、とにかく面白い話が多く、ユーモアの表現の巧みさには思わず唸ってしまいます。自虐的ユーモアが殆どですが声を出して笑ってしまった部分も沢山!

最後の章は、日本滞在記になっており、タイトルの「If you're engulfed...」はホテルの非常時の対応説明書にあった言葉だそうで、そういわれると日本での英語独特のちょっとズレた英訳ですね。

The Alchemist Paulo Coelho

ブラジル人作家のCoelhoの著作を読むのはこれが初めてで、正直名前もよく

知らなかったのですが、ベストセラー作家なんですね。彼の著作は150ヶ国語に
翻訳されているとか。

でも、正直言って、参加しているブッククラブの「今月の本」に選ばれてなかったら
実際に自分では

まず選ばないだろうなあという本でしたが、読んでみて正解でした。

ストーリーは、とある羊飼いの少年がピラミッドの側で宝物を見つける夢を見たこと
から

はじまります。夢が気になった少年は、ジプシーに相談に行き、そこで

「おまえはピラミッド目指してエジプトまでその宝を探しに行くべきだ」と伝えます。

そしてその後の少年の旅の様子が書かれるわけですが、もちろん途中で彼は色々な人と

出会うことになります。

全体的なストーリーは、ある意味おとぎばなしのようなのですが、シンプルな文章の
中に、はっとさせられるような意味が隠されていることが多々あります。個人個人が
持っているという

Personal Legendとは何か。そして、それを見つけるためにはどうすれば良いのか。

下手するとはたと本を置いて自分の人生についてじっくり考えてしまいそうな本で
す。とにかく奥が深い。

最後まで読んでみて初めてなるほど〜!!!と唸りたくなるようなエンディング。

我がブッククラブでは、この本の感想のディスカッションで大いに盛り上がりまし
た!

Outlander by Diana Gabaldon

小さい頃「赤毛のアン」のアンとギルバート、「あしながおじさん」のジュディとジャーヴィスぼっちゃん、「若草物語」のジョーとベア先生にときめきましたか？

今でも読み返すと甘酸っぱさにうっとりしませんか？でも今はオトナだからちょっと物足りないかも...
と書いていたりしませんか？

そんな方にはロマンス小説がおすすめです。

ロマンス小説はオトナの為のおとぎ話であり、現実逃避手段としてもってこい。

恥ずかしがらずに読んでください。読んでいるのを公表しなければ誰も白い目で見ませんから（ブックカバーは必須）。

もちろん物語の芯がある程度しっかりしていないとその世界に没頭し現実を忘れることができません。

その点、この本は文句なし。

ロマンスがメインであっても、歴史あり、冒険あり、サスペンスあり、まるで実在するかのように生き生きとした登場人物たち...娯楽小説の要素をこれでもかとこれでもかと詰め込み、圧倒的な筆力でもって読者を掴んで離しません。

馬鹿馬鹿しいほど厚い本ですが読み終わりがたくな！いつまでも読んで欲しい！と思うこと請け合い。

新聞の書評欄にはぜったいに載らないジャンルですが一読の価値ある本もあるんです、ということでお薦めいたします。

蛇足。私はこの本を読み終えて以来医者じゃないけど肩の脱臼ぐらいを治せたほうがいいのかもしいないと思うようになりました。

とら次郎さん

A. Lincoln by shojiさん

貧しい少年時代から政治家としてのさまざまな挫折、上院選に立候補して行った対立候補者のダグラスとの歴史的なディベートや大統領になってか

らの南北戦争の好転しない戦局などが描かれています。そういう状況の中

でもユーモアのセンスで相手を楽しませたリンカーンのひととなりを知る

ことができます。

『I Am Legend』 Richard Matheson

いまさらな本ですが、英語では読んだことがなかったので再読。3回映画化されてい

て、3度目の映画はウィル・スミス主演の『アイ・アム・レジェンド』ですが、1本目を

のそき映画版は原作とはまったく違った展開をみせますので、原作未読の方はぜひ読むことをおすすめします。全世界の人類が吸血鬼になってしまった世界で、ただひとりの人間として孤独に戦う主人公を描いていますが、最後の最後になって、価値観や善悪が逆転します。50年代に書かれたSF小説ですが、現代社会に置き換えて他者との共生について考えてみる事ができる傑作。

『Scrapbooks: An American History』 Ms. Jessica Helfand

19世紀初頭から現代までの、個人のスクラップブックを通してアメリカ文化を俯瞰するという本です。スクラップブックの制作者は無名の一般人が中心ですが、なかにはゼルダ・フィッツジェラルドやリリアン・ヘルマンなどの有名な人も。写真や新聞記事、雑誌の切り抜き、チケットの切れ端など、さまざまな紙の断片から歴史や記憶をかいまみるのできる、眺めているだけでも楽しい1冊。解説を読むと、さらに当時の時代背景を知ることができ、アメリカの生活文化史を学ぶのにも最適。

『To Have and To Hold』 Philipp Blom

本、昆虫、骨、アート、驚異の部屋からハプスブルク家やJPモルガンのコレクションまで、蒐集家の歴史。16世紀科学者が集めた膨大な収集品やハプスブルク家の神ローマ皇帝ルドルフ2世の驚異の部屋、オランダの解剖学者やビョートル1世の人体に対する興味は、現代の博物館の前身となりました。自然科学や骨董品、聖遺物だけでなく、書籍や絵画、ミルクのボトルキャップやプラスチックのカップまで、集めることに駆り立てられた人々の歴史が詰まっています。わくわくすると同時に、そこまではるか、と思うようなことも。読んでいる最中、まるで大きな博物館を訪れているような気分になりました。

――開高健

よろしく願いいたします。

楽しいのでぜひ、来年もこの企画やってほしいです。

それに向けて、たくさん読まなくっちゃ！

春巻

『A Painted House』 by John Grisham

「1950年代、アメリカの貧しい家庭の様子、戦争にを送り出している兵士の帰りを今か今かと待ち続けている家庭の様子がよく描写されている。」 by Knakaさん

The remains of the day

第2次世界大戦前後の英国で執事をしていた人が語り手。秩序が崩壊しようとするなかで、秩序に忠実にしか生きられない男。規を越える機会があったのに越えることが出来なかった事の秘められた悔恨が切ない。Kazuo Ishiguroの端正な英語が男の端正な生き様に重なる。

Dog on it

警察をクビになった探偵に飼われている、警察犬学校を中退した犬が語り手のミステリー。そう、犬が語るので。古いポルシェに乗って現場に向かうとき、隣の犬を見かける。

探偵：Hey, Chet. Don't bark.

犬：Bark? Did I Bark?

知らずに吠えてるオトボケ振りがたまらない。

*本が手元にないため、引用は正確でないかもしれません。

The philosopher and the wolf

ひよんな事から子狼を飼い始め、米国、英国、仏で11年間を共に過ごした若き哲学者の手記。こう書くと、狼の飼育記録のようだが、本質的にはスポーツ、ナンパ、酒に明け暮れていた著者が狼と共に生きることで思索を深め、職業的基盤も確立していく魂の自叙伝。狼育ての超面白エピソードも満載で、動物と屁理屈の好きな人には必読書。（これは、アマゾン日本に書いたレビューの簡略版です）。

金子誠一

World Without End by Ken Follett

前作のThe Pillars of the Earthを読んだことが有り、その続編ということで手にしました。小さな活字で1200頁を超える大作で苦勞しましたが、物語の展開、登場人物のキャラクターなど前作にも増して魅力的な作品で、飽きることなく読み終えることができました。

中世ヨーロッパの社会情勢、権力者の横暴、戦乱や黒死病の蔓延の中で、都市の再生、繁栄を志し、夢を実現させていった市井の人々の姿に心を打たれます。物語の最後で主人公の二人が、聖堂の塔上で交わす会話、情景の描写は感動ものです。

前作と合わせて、一読をお勧めしたい作品です。

The Girl with the Dragon Tattoo by Stieg Larsson

The Girl Who Played with Fire by Stieg Larsson

Swedenの作家の小説は本作が初めてでした。

Amazonの渡辺さんのレビュー、ブログ「お気楽ペーパーバックの楽しみ」の隣の老人さんの書評がきっかけです。

登場人物 Lisbeth Salander、Michael Blomkvist、などの個性と行動力、欧州、ロシアを取り巻く歴史と社会情勢を背景に据えた緻密なプロットと展開の早さが魅力。Swedenの地理、歴史など基本知識を勉強してから読むと更に面白かったかと思いました。

三部作ということで、最終のThe Girl Who Kicked the Hornet's Nestも英語版のPaperbackが出次第、読む予定です。

昨年以前に読んだものですが、

Kate Mosse の Labyrinth、Sepulchre も中世と現代のフランス、カルカソンヌを舞台とした壮大なドラマ。

歴史と地勢、人物のプロットが秀逸。800頁前後の大作ですが是非お勧めの逸品です。

娘も前者Labyrinthの邦訳で魅き込まれ、後者の邦訳版を楽しみにしている様です。

Kamekichi

Markus Zusak/The Book Thief

ヒトラー支配下のドイツが舞台と聞いてたいていの人が想像する内容とはかけ離れた出来事です。涙を誘う感動物とも違うし、当時の歴史を伝えるための本でもありません。

Lieselという女の子の物語が死神の視点から語られています。

私が何よりも気に入った点は、何が起るか前もって教えてもらえるところです。そのためさほど先に気をとられることなく、Lieselやその他の登場人物たちの日々、そこに潜むmagical momentsなどを存分に味わうことが出来ました。設定から言っても楽しいことばかり起こるお話ではありませんが、何度も読み返したくなる本です。

Stieg Larsson/Millennium series

あまり見ない類の人たちが主人公なのにも関わらず、登場人物の行動を読んでなんでそんなことをするんだ！と思ったことが一度もないサスペンス/スリラーの本は初めてかもしれません。読んでいて頭の中がすっきりしていく爽快感をこれほど顕著に味わったのも初めてでした。読者には明らかなのになぜか登場人物がはじから謎解きのクローを逃してしまうような読者を馬鹿にした書かれ方もしてません。それでも十分に複雑で先が読めず、BlomkvistとSalanderと一緒に謎解きを楽しめました。

Larssonが生きていたら10作のシリーズの予定だったそうで、3作しか読めないのがとても悔やまれます。

Maria V. Snyder/Poison Study

主人公の女の子Yelenaが死刑執行か毒見役になるかを選ぶところから始まるこのお話は、設定も魅力的なのですが、なによりYelenaとValekをはじめとした登場人物が私好みなのでした。

助けてもらうのを待つことしかできないような女の子とは相反するYelenaに、コマンダーに忠誠心の厚いchief of securityで暗殺者のValek。プロットも中身も濃いファンタジーです。どうしてもっと読まれてないのか不思議ではない！

By ちょこさん

Maria V. Snyder / Poison Study

問一髪で死刑を免れた少女イエレーナは、国を治める総司令官の毒見役を命じられる。冷徹なヴァレクの指導のもと、毎日命がけで仕事にあたる彼女。果たして彼女の秘密とは？

「トワイライト」を読みながら「べら、しっかりしろよ」と思ったあなたにお勧めのヒロインが登場する、ヤングアダルトファンタジーです。

Vikas Swarup / Slumdog Millionaire

スラムで育った孤児のラムが、ほんの少しの幸運を元手に掴む夢。アカデミー賞を取った映画が有名だが、原作の細かい描写を読むと味わいが深い。インドの文化や社会に馴染みがなくてもどんどん引き込まれる小説。

Jodi Picoult / My Sister's Keeper

結末が全く予想がつかなくて、まるでミステリーのような一冊。

先天性の白血病の姉ケイトと、彼女に骨髄などを移植できるように人工授精で生まれて来た妹アンナ。ある日アンナは、もう姉のために自分の身体を切られるのはイヤ、と家族を相手取って訴訟を起こす。

家族のために私たちはどれくらい自分を捧げるべきなのか？訴訟が進むにつれ、家族の深い思いが浮き彫りになっていく。

角モナさん

1. Slumdog Millionaire by Vikas Swarup

ばかばかしいテレビクイズ番組は消して、極上のエンターテインメント、原書「Q & A」を満喫してはいかがでしょうか。クイズに答えるたびにゲームのステージをクリアした充実感があり、賞金が増えていくスリルも満点。年末のこの時期にジャンボくじが当たるような興奮があじわえます。

2. The Curious Case of Benjamin Button by F. Scott Fitzgerald

F.S.フィッツジェラルドの魅力はギャツビーだけでないですね。こんな奇想な物語も書いているとは。短編とはいえ、彼の華麗な文を十分あじわえる作品です。

3. Nocturnes by Kazuo Ishiguro

実はまだこれは未読ですが、今年中に読みたいと思っている本です。彼の短編、それも音楽がキーワードになっているのなら、読みのがせません。

By コニコさん

Olive Kitteridge Elizabeth Strout 著

2009年度ピューリッツァー賞受賞作なので、ご存知の方も多いと思います。いわゆる「短編で綴られた小説」。舞台はメイン州の海辺の田舎町クロスビー。とことん保守的な土地柄で、先祖代々この地で暮らし、この土地を強く愛している町民が多く、子供たちもまたそうした親の暮らしを継いでくれるだろうと思っていると、（日本の地方都市でも同じですが）この現代社会の風潮ではなかなかそうはいかない。よそ者は疎まれ、人々の食生活も昔ながらのもので、都会で流行る健康食などとてもない。

そんななかで暮らす人々の人生模様とその内面が、簡潔ながら深みのある文章で綴られています。13の短編をつなぐ太い糸がタイトルともなっている女性、Olive Kitteridge。長年町の中学で数学教師を勤めてきた彼女は、普通の女性より頭ひとつ背が高いというその体型でまず人目を引き、ついで性格がまたかなり強烈。弱介で容易に人と馴染もうとせず、物言いは辛辣で直截、感情の起伏の激しい彼女は、生徒からも町の人たちからも恐れられています。対する薬剤師の夫Henryは、温厚で誰にでも愛想がよく、皆から愛される人柄、傍目からは完全に女房の尻に敷かれている様子。

こんな夫婦の人物造形がまず鮮やかに提示されるのが、最初の『Pharmacy』。他にも何篇が見られる手法ですが、今や職を退いた老年のHenryが教会へ行って帰るまでの短時間の回想によって、夫婦が中年だった頃のあるエピソードが語られ、同時に現在の、人生の幾多のしこりや亀裂を共に乗り越えてきて今では喧嘩しつつも強い絆で結ばれている（夫婦どちらもが、相手のいない暮らしには耐えられないと心底思っている）老夫婦の様子が描かれます。エピソードの中心となるのが、当時のHenryの、妻とは正反対で優しく女らしい性格の、薬局で働く若い女性に対するほのかな思い。Henryの憶測では、どうやらOliveのほうも当時同僚教師と何かあった模様（この件はのちに『Security』で、Oliveの側から語り直されます）。そして、ここで提示されるちょっと辟易するような私の強い「謝ったことのない」女

Oliveの人物像は、次の『Incoming Tide』では、鋭く賢い観察者として元生徒の内面を推し量り、繊細な思いやりでもって相手を包む姿に変わります。怖いキトリッジ先生は、また生徒から信頼され尊敬される優れた教師でもあったようなのです。

こんな具合に、Oliveとはまったく関係のない物語のなかにも彼女の町での存在感をちらっと見せながら、十三の物語が並んでいるのですが、メインの流れとなるKitteridge夫婦の人生とはといえば、田舎町で夫婦で地道に共働きし、一人息子が結婚して同じ町で所帯を持ち、自分たちと同じように子を育てていく姿を見る日を楽しみにしながら、近くに立派な家まで用意してやっていたのに、なかなか結婚しない息子に気をもまされたあげく、やっと結婚したと思ったら、相手は都会から来た（Olive以上に）我が強くて権高で高慢ききなヨメで（ヨメは内科医で、足病医の息子より収入もずっと上）、ことあるごとにむしゃくしゃさせられ、掲句に息子夫婦は突然遠いカリフォルニアへ引っ越してゆき、Kitteridge夫婦はがっくり、そこへ息子から離婚したと知らせがきてうろたえ（今時、息子の離婚を他人に告げられない夫婦なのです！）、喧嘩ばかりしながらも互いにかげがえのない存在だったのに、夫Henryが発作によってただ「生きている」というだけの存在となってしまう、一方息子は子持ちの女と再婚してニューヨークへ移り、、、という具合。Oliveという頑なな女性の人生とその終盤のうつろいを、彼女の周辺の人々の人間模様とあわせて、じっくりと見せてくれます。

13の短編で描かれるのは、夫婦の愛や気持ちの齟齬（うちの亭主は「めし、風呂、寝る」の三語しかいわないというのは、よく妻の不満として取り上げられるところですが、『Starving』に登場する夫は、子供たちが独立してがらんとした家が寂しくてたまらない自分とひきかえ、さっさと新たな生き方を確立して趣味の仕事で金まで稼ぐようになり充実した日々を送る妻が、夫婦の会話といえば「あなた、晩御飯は何が食べたい？」としかいってくれないことに強い不満を持ち、心の繋がりや育める他の女性に惹かれていくのであります）、親子の愛情や思いの行き違い、歪んだ親の愛情に傷つ子供、夫の浮気に苦しむ妻、パートナーに先立たれる悲しみ、などなど、誰にでも思い当たることがあるような、身近なテーマばかり。どの読者も、どこかしらに自分の物語を見つけるのではないのでしょうか。

読み進むうちに、Oliveの喜怒哀楽がじつにリアルに迫ってきて、堅いゴツゴツした殻の下にある傷つきやすくナイーブな彼女の心根が愛おしく、第一話では「嫌な女」だった彼女のイメージがどんどん変わってきます。『A Different Road』での、銃を構える犯人の目の前でOliveが姑に対する昔の恨みを持ち出して夫婦喧嘩を繰り広げる場面は、ドタバタコメディのようでなんとユーモラスだし、『Security』で、初めて訪ねたNYの息子の新家庭（息子は自慢げなのですが、Oliveにとっては狭苦しい都会のアパートはなんと惨めだったらしく見え、親がせっかくあんなに広々とした美しい家を用意してやっけるのに、とつい思ってしまうのであります）であれこれ胸をよぎる思いを、今や聞いても理解できない寝たきりの夫に電話しないではいられない（施設に電話して、いつもぼうっと薄笑いを浮かべているだけの夫の耳に受話器をあてがってもらっては、「前のヨメはタカビーで嫌味な女だったけど、今度のヨメは、ありやアホだわ」とか、「ねえねえ、うちの息子つたらねえ、訪ねてきた母親を地下の物置部屋みたいなところで寝かすのよ」とかしやべるんです）姿や、その夫がいなくなると、今度は、うっとうしがら

れるのをわかっていながら、なにかあるごとに息子に電話してしまう『River』での姿は、意地っ張りな癖に実は寂しがりな彼女の愛らしさが出ていて、切なくなります。最後の『River』ではそんなOliveにちゃんと救いが用意されていて、温かい読後感が残るのもいいです。

一篇一篇がじつに見事。会話やちょっとした描写から鮮やかに登場人物の人となりや人生のありようを浮かび上がらせる描き方も、構成もすばらしく、13篇どれもはずれがありません。滑稽で悲哀に満ち、それでいて愛おしい「人生」というもの、人が生きるということを、しみじみ考えさせてくれる一冊です。

EVERYTHING RAVAGED EVERYTHING BURNED WELLS TOWER 著

生来のザル頭が最近いつそうひどくなら、読んだ片端から記憶が薄れます。短編集は特にそうで、ちょっと時がたつともはやすボンヤリとした「感触」くらいしか記憶には残らないのです。このデビュー短編集は、その際立った個性でもって私の記憶の霧のなかからくっきりと屹立しておるのであります。好き好きはあると思いますが、文学好きの方なら、読んで損はない一冊かと。

人生のとあるところをさくつと切り取って、切断面からその人物や周囲の人間の人生の成り立ちを垣間見せる、じつに短編らしい短編が並んでいます。乾いた筆致で、的確に人物像を描き出すその描き方は、細やかというのではなく、鋭く、ウェットなところのない独特の情感を醸し出しています。

中年男、小学生の男の子、老人、少女。登場する主人公の年齢や性別はさまざまですが、みななにかの挫折感や屈託を抱えています。とはいえ、挫折感や屈託をまったく抱えていない人間のほうがむしろ稀なのです。そういう意味では現代人の普遍を描いているとも言えるかも。その普遍が、じつにまあヘンテコなのです。人間というのはまったくもってヘンテコな生き物であることよ、とつくづく思わせてくれる作品集。現代のアメリカを舞台にした話が並んだあけく、最後はなんとバイキングの物語。伝説をなぞったかのような淡々とした殺戮の描写に、な、なんでここにこんなもんがあるの、しかもこれが表題作？ と訝しみながら読み進めていくと、最後に、おお、こうきたか、とうならされます。いずれも見事な出来で、とてもデビュー作品集とは思えません。

Lives of Mothers & Daughters: Growing Up With Alice Munro Sheila Munro 著

作者は、しばしば「短編の女王」と称され、ここ数年毎年ノーベル文学賞候補としても取沙汰されるカナダの短編作家アリス・マンローの長女。海を渡ってカナダへ移住してきた母の祖先の話から語り起こして、母の生い立ち、結婚して子供を育てる傍らつぎつぎと珠玉の作品を生み出してきたこれまでの人生を、その娘として生きてきた自らの物語も交えて記しています。

マンローは、文学の世界ではともすると軽く見られがちな短編一筋に書き続けてきた作家です。よく比較される同じカナダの有名作家マーガレット・アトウッドとはまったく異なり、政治、社会、思想などといった「大きな」テーマには見向きもせず、実験的手法を凝らしたりもせず、愚直に、といつていいくらい、自分が生まれ育ったオンタリオのごく普通の人々の生活（とはいえない、それがかつてごく普通か、という点で決してそうではなく、そこにはしばしば目を見張るような強烈なドラマが潜んでいるわけですが）を書いてきました（ちなみに、最新刊『TOO MUCH HAPPINESS』の表題作は、珍しくロシアの歴史上初の女性数学者ソフィア・コペレフスカヤの生涯を綴っています。長編を書いてみようか、という発言もどこのインタビューで耳にしたことがあります。78歳のマンローは何かの転換点を迎えているのかも？）

マンローの作品を読んでいてよく思うのですが、マンローの世代の女性というのは、かつてなかったほどの大きな「女の暮らしの激変」を生き抜いてきたのではないのでしょうか。それまでの女性性は、妻/母という役割のなかでそれなりに安穩と生きていった（もちろん抑圧その他に対するストレスは別として、一応は、という意味です）。母の、祖母の人生をそのままなぞってゆけなかったわけですが、ところが「自由」という厄介なものがそんな枠組みを木っ端微塵に打ち砕き、見も知らぬ荒野で自分道を探さねばならなくなった。マンローの作品で見られる、そんな荒野を彷徨う女性たちの姿は、この本で描かれるマンロー自身の姿にも重なります。

貧しい家庭で育ち、奨学金を得て大学へ進み、学費が続かず結婚。つぎつぎ子供を産んで育てるなかで、マンローはひたすら短編を書き続けます。パーキンソン病で寝たきりの母を抱える実家をいわば「捨てた」、両親が貧しい生活をおくっているのに自分はこんな豊かな暮らしをしているのか、という後ろめたさ。近所の主婦たちからお茶に誘われると断れず、貴重な執筆の時間を削られ

る口惜しさを隠して「普通の主婦」を装ってしまう気弱さ。シャイで繊細で実直なマンローの人格がくっきりと浮かんできます。やがて初の短編集でGovernor General's Awardを受賞したときの新聞の見出しは『主婦が暇を見つけて書いた短編集』。ちなみに、後に離婚することになる夫は、マンローの作品の最も良き理解者であり、妻の才能を信じ、励まし、支援し続けたそうです。父のためにこれだけは言っておかねば、という勢いで、娘である作者は記していました。この離婚についてもっと書かれているかと、ヤジウマ根性で期待していたのですが、このあたりはじつにあっさり。ま、二人の実の娘としては仕方ないのかもしれませんが。そうなのです、マンローはその後離婚、再婚をくぐりぬけながら、着々と作家としての業績を重ねていき、カナダにとどまらず世界的な名声を獲得していきます。このあたりからは娘としての作者自身の思い出がかなり入ってきて、興味深いものがあります。ちょうどカウンター・カルチャーの時代に娘たちを育てたマンローの母親ぶりというのは、おそらくこの時代のそこそこ教養のある「ススんだ」母親には共通していたんじゃないかと思いますが、心配しつつも、娘にさまざまな「体験」を傾りたてたりするようなところもあるという、自分の時代からすると夢のような自由を生きた娘たちを眩しく見つめるスタンスであったようです。そしてこの頃からは作者は「大作家マンローの娘」という重圧を感じ、劣等感に苦しんだりします。

作家マンローのいわば「生身」の姿が描かれているという面白さ以外のもうひとつの本書の魅力が、マンローの創作の秘密がちこちに散りばめられていること。短編の素材となった実際の出来事が記され、それをマンローがどのように膨らませていったかが語られます。リストを作って、紹介されている作品をもう一度読み直すと面白いだろな、と思いつつ、まだ実行していません。マンローのファンなら必読。マンローを知らない方でも、激変の時代を作家として生きた女性の伝記として面白く読めるのでは。もしマンローがノーベル文学賞を受賞したら、ぜひ本書を思い出して読んでみてください。

By 小竹さん

Joyce Carol Oates "The Tattooed Girl"

毎年ノーベル賞候補に挙げられるオーツですが、日本での知名度はいまいち？
詩、小説、評論、多岐にわたる活動を行っているうえ、多作家であるわりには
「これ」という作品が日本では知られていないように思います。

わたしも何から読んでいいのやら決められず、謎(?)の作家でした。
YA本やホラーも多く、自分がこの種の作品が苦手ということもあります。
とりあえず、完結した作品で適当な長さの小説、ということでこの作品をチョイス。

筋書きは比較的単純で、裕福なユダヤ人作家でギリシャ文学の研究者である
主人公が、貧しい家庭からきた頬にタトゥーのある娘を偶然に助手兼家政婦に雇う
こととなり・・・というところからストーリーは始まります。

淡々とした内容ですが、およそ対照的といってよい二人になにか起こっていくか。
ゴシックホラーの名手である作者は、微妙に不吉な影を匂わせつつストーリーを
進めてゆきます。

ダイナミックな起伏はないのですが、不安感といったものが読者にページをめくら
せませす。達意の作家という気がします。ラストはえっ!?!というもののですが、
周到に伏線が用意されており、納得。作者はこの小説を「スリラー」である、と語って

いますが、確かに。

なぜノーベル賞候補となる名声を得ているのか、少しだけわかったような。静かに語るのになぜか人を強く惹きつける話し手っていますよね。単純な筋立てながら、知らず知らずに読者を作品世界に引っ張り込む力量に感心しました。

ただ、この作家は一筋縄では行かない、もっと色々な引き出しがあると思います。それを知りたいのですが、その第一歩として格好の作品ではなかったかと思います。

Walter Mosley "The Blonde Faith"

かつてデンゼル・ワシントン主演で映画化された「青いドレスの女」は、黒人探偵イージー・ローリンズシリーズの第一作であり、この作品は最終作（第九作）です。

主人公、イージーは金のため、あるいはピンチに陥った友人を救うため事件に否応なくかかわっていくというのが、このシリーズの基本線です。

五作目の"Little Yellow Dog"(邦訳名「イエロードッグ・ブルース」)で翻訳が途切れており、もっと日本で知って欲しい作家であるのに、残念です。ただ、このシリーズの大きな特徴で魅力であるエゴニクス（黒人英語）のニュアンスが翻訳では伝わらないだろうなあ、とも思います。

シリーズは第二次世界大戦直後からスタートし、この作品は1967年を舞台としています。アメリカの黒人社会はこの間に大きく変化するのですが、このシリーズはその変遷を写し取ったクロニクルでもあります。

同時に主人公イージーも変わっていきます。第一作では白人には憤怒をこらえつつ卑屈にならざるを得なかったのが、この作品ではかなりそういった面は抑えられ内面の苦悩が強くなっています。それは1967という時代を反映したものなのか、50歳を前にした主人公自身のものなのか。

シリーズとはいえ、単体でじゅうぶん鑑賞にたえる作品です。最終作らしく、憂愁の色濃い作品ですが、最終作に至りついに登場した白人ヒロインとイージーが人種を超えて共感するシーンは感動的です。逆に、それが故にこの作品で最終作である理由かもしれません。

黒人英語が多用されていますが、それを除けば文章は平易です。

この作品から、Easy Rawlins Series のファンが増えてくれればとても嬉しいのですが・・・。

(今東 功さん)

私立探偵のBarnie とその相棒である愛犬Chet が捜索をする行方不明の少女。自らの意志で家出したのか、それとも誘拐なのか。失踪の真意がつかめぬまま、Barnie と Chet は事件に巻き込まれて行く……。犬の視点から描かれた、楽しくて、優しくて、そうして時折じんと心にしみる物語。とにかく犬のチャットのキャラクターが最高で、読んでいるうちに少女のことなんてどうでも良くなってしまふほどです (笑)

ごろんちゃん

‘The Forgotten Garden’応援文 by ムルハウザー

■無人島本間違いなしの忘れられない1冊！

●導入部の自己流あらすじ

第一次世界大戦前夜の1913年、4歳の少女がオーストラリアのとある港に下船する。しかし、付き添いはおろか迎えの影さえない。夕暮れ迫る埠頭、小さなスーツケースに腰かけ一人途方に暮れる少女。

見かねた港湾部長のヒューが連れ帰るが、少女は記憶喪失で名前さえ名乗れない。スーツケースの中身は衣類、女流作家の手になる1冊の童話集などで、身元の手がかりになりそうなものはない。

各方面に照会するが望ましい返事は返ってこない。そして、ネルと名付けられた少女は、ある罪深い事情からそのままヒュー夫妻に育てられることになる。

17年後の1930年、ネル21歳の誕生パーティの席上、ネルはよかれと信じた父から出自の秘密をささやかれる。その途端、ネルのアイデンティティーは崩壊し、以後、彼女は人が変わったようになってしまう。

さらに時が流れ2005年、臨終の床にある95歳のネル。孫娘のカサンドラが看取るなか、ネルは意味不明の諺言を残して亡くなる。「あの人が、女流作家が待つように言ったの……」。

祖母の死後、カサンドラはネルの妹たちから姉は私たちとは血のつながりのない他人で、じつは戸籍すらないと明かされる。また、弁護士からカサンドラは祖母から遺産として英国のコテージを相続したことを知らされる。

弁護士に英国行きを進められるが、カサンドラは気が進まない。しかし、彼の一言に耳がそばだつ。コテージの立つ地所の元々の持ち主は画家のナサニエル・ウォーカーだという。彼の挿絵はカサンドラのお気に入りだ。そして、それは10歳のとき、母親からネルの許に置き去りにされたあの日、祖母の寝室でこっそり読んだ童話集の挿絵画家ではなかったか。

祖母の遺した小さなスーツケースをあらためているうちに、カサンドラはネルの書いたメモを発見する。祖母は自分の出自がもう少して明らかになりそうなこと、また、英国への移住を決意していたことを知る。そんな大事な計画を、なぜ祖母は断念したのか。そこで、カサンドラは思い当たる。計画を実行に移す直前、祖母は母から私を押しつけられたのではなかったか？ 私のために、私のせいで、祖母は計画をあきらめた？

こうしてカサンドラは、ネルの遺志を継いで彼女の出自を探るべく英国行きを決意する。それはマウントラチェット家の忌まわしい秘密を明かす旅でもあり、カサンドラ自身の再生の旅でもあった。

●読者をリーダーズ・ハイ状態へと誘う語りのテクニック

以上が導入部で、すでに112ページ（Pan Booksのpaberback版）。全体はなんと625ページもあって、正直、厚いです。本が届いた時、予想外の厚さに思わずひるんだほど（背の幅約39mm）。果たして読み終わられるだろうか？ 不安におびえながら読み始めたのですが.....。

印象的なオープニング、小気味よい場面転換、各章の有機的なつながり、効果的に反復されるキーワードといった巧みな語り口に乗せられ、ネルに戸籍がないわけを知った頃には、早くも本書に引きずり込まれていました。しかし、それはほんの序の口に過ぎなかったのです。

洋書読みなら、一度ならず覚えがあるのではないのでしょうか？ ツボにハマるといふか興が乗るといふか、読んでいる本の世界の虜になると、あへら不思議、未知の単語もなんのその、意味がどんどん類推できて、読む速度も一挙にスピードアップ、なぜか読解力が急に高まるリーダーズ・ハイ状態！ たちまち、その状態へと突入していったのです。

それはひとえに構成の妙と語り口のうまさゆえでしょう。導入部以降は、謎の女流作家にまつわる物語（1900～1913年）、ネルの英国での探索行（1975年）、カサンドラの追跡調査（2005年）の三つのストーリーからなるのですが、それらが交互に語られて進みます。その結果、時の隔たりを感じさせず、すべての出来事が現在形のようにいきいきと繰り広げられます。

さらに、ある時点から年代こそ違え、舞台が完全に重なり、過去が現在にも影を投げかけていることがわかってきます。そして、同じ人物や同じものが時代を変えて繰り返し登場します。その結果、あの林檎の木はあの時の林檎の木とか、彼はあの時の少年だったのかといったように、読者が自ずと思い至る仕掛けになっているのです。この手法はじつに見事です。しかも、謎は明かされると同時に、新たな謎が生まれます。しかし、作者はその謎をもったいぶらず適度な間を置いて解き明かしてくれるというか、読者に気づかせます。こうなるともうページを繰る手は止まりません。

そうして、夢中になりながらエピローグにたどり着いた読者は、ネルの悲劇は単なる事故や過ちなどではなく、人間の織りなす思いや感情のもつれから紡がれた壮大な因果の結果、避けられない必然であったことを思い知らされるのです。そして、本書に挿入された童話の意味にもはたと思い至って、またしても作者の巧緻に舌を巻くことでしょう。そうしたら、ぜひ、もう一度、エピローグの文章を読み直してみてください。作者のネルに対する思いに心打たれずにはおれないはずです。個人的には、読後、これほど深い余韻に包まれた小説は久しぶりでした。

●読後も副作用が

本書の文章はイメージを喚起しやすく、読後半年近く経った今でもいろいろな場面が思い浮かびます。しかもまるで、この映画の予告編を目にしたかのように、ありありと。本書は本国（オーストラリア）はもとより英米でも好評なようですから、映画化の可能性も高そうです。願わくば、BBCで8時間くらいの連続テレビドラマ化を！ というのも、舞台は英国の古いお屋敷、いわく十分の複雑な迷路、四方を壁で囲まれた秘密の花園、崖の上に立つコテージと、まさにBBCにおあつらえ向きだからです。

作者も女性、描かれるのも世代を超えた3人の女性の生き方と女性向け要素が濃い本書ですが、壮大な謎解き、圧倒的な物語の面白さ、それを支える構成や語りの妙など文芸ミステリーとしても極上、小説好きになら老若男女誰にでも自信をもっておすすめできます。

この応援文を書くに当たり、ひろい読みしていたら急に再読したくなって、実際読み始めてしまいました。すると、初読の際に読み飛ばしていた細部にまで作者の神経が行き届いているのにすぐに気づかされました。本書のさりげない、それでいて読者を駆り立てずにはおかぬ語りの技巧を堪能するには、再読必須かも知れません。個人的には、これからも折に触れて読み返すでしょうし、無人島へも必ず持っていくます。

長々と駄文を弄してしまいましたが、この読者をして思わず熱く語らせてしまうところこそ、何にもまして本書の魅力の証1ないでしょうか？ なにしろ、希代の読書家かつ読み巧者のわれらが渡辺由佳里さんも「この本がどれほど好きかをちゃんと説明するにはわが家にご招待してお茶ではなくモルトウイスキーあたりをかかえて一晩中お話しするしかない……」(★リンクお願いします)とおっしゃっているくらいです。そう、読んだら語らずにはいられなくなってしまふ本なのです。一晩中語り合いたくなくなってしまふ本なのです。本書こそまさに記念すべき第一回「これを読まずして年を越せないで」賞にふさわしい傑作だと思います。

Slumdog Millionaire by Vicas Swarup

インド版「クイズ・ミリオネア」にスラム出身の少年が出場し勝ち抜いていく物語。クイズ1問につき一章、なぜ彼が答えがわかったかというお話が展開されます。短いセンテンスで繰り返しを用いたスピード感溢れる文体は、スリル満点のストーリー展開にぴったりで読みやすく、読み出したらやめられないことまちがいにしです。また少年の恋心やタージマハールの美しさなど、情感のある描写も盛り込まれベストセラーになるだけのことはあります。

The Namesake by Jhumpa Lahiri

文豪にちなんで「ゴーゴリ」と名づけられた、インドからアメリカに渡った夫婦の間に生まれた男性の物語です。ゴーゴリ本人を中心に、その両親、妻の物語でもあります。異国で生きようとする人々の姿を、静かな筆致でつづり、しみじみした味わいがあります。

Nocturnes by Kazuo Ishiguro

タイトルの示すとおり、音楽と夜にまつわる短編が5つ集められています。どれもかなえられない夢をかかえた人たちを、いつもの静謐な文体でしみじみと、また時には珍しくコミカルに描いています。

イシグロファンとしては、「イシグロ節」が薄れた感じを物足りなく、寂しく思う面もありますが作者の新しい試みとして、また今年読んだ中ではやはり秀逸として、推薦したいと思います。5編は独立したお話ではありますが、最初のCroonerで少し出てきた人物がまた4つ目のNocturneでは中心的な人物として登場しているなど、5つの作品をひとまとまりの中篇として考えると、また新たな感慨が生まれます。

中本 雅子

Doris Kearns Goodwin のTeam Of Rivals
の推薦文です。

リンカーン大統領が選挙の際のライバルたちを自らの政権のなかに取り込んでいきます。最初はリンカーンを軽蔑さえしていたライバルが彼に魅了されていきます。なかでもスオード國務長官はリンカーンが暗殺されたと聞いて涙します。史実でありながら人間ドラマとして読めます。

shoji

Blink By Malcolm Gladwell

Outliersで大人気、そして今秋にはWhat the dog sawという過去の記事をまとめたエッセイ集も売れているMalcolm Gladwellのこれは2冊目の著書です。

Blinkとは瞬きをするような一瞬のことですが、この本は、人間の瞬間のカン、そしてその時にどのような判断を下すのか、そしてそんなごく一瞬に下した決断が正しい場合と間違っている場合について詳しく解説しています。彫刻などの美術品の贋作を一目で見破るプロや、罪の無い一市民を瞬間の勘違いで射殺してしまった警官のエピソードなど、彼独特のユーモアあふれる、フレンドリーな文体で、つつい引き込まれてしまいます。

ノンフィクションですが、堅苦しくなく、とても興味深い本です。

If you are engulfed in flames By David Sedaris

私はカナダに住んでいることと、普段全くと言って良いほどラジオを聴かないので

NPRでは知らない人は居ないというほど有名なDavid Sedarisのことは殆ど

知りませんでした。ですがこのエッセイ集、友だちに「絶対面白いから」と薦められて

読み出し、あっという間に読み終えてしまいました。エッセイなので気合を入れずに

さくさく読めるのが良いし、とにかく面白い話が多く、ユーモアの表現の巧みさには

思わず唖ってしまいます。自虐的ユーモアが殆どですが声を出して笑ってしまった部分も沢山!

最後の章は、日本滞在記になっており、タイトルの「If you're engulfed...」はホテルの

非常時の対応説明書にあった言葉だそうで、そういわれると日本での英語独特のちょっとズレた英訳ですね。

The Alchemist Paulo Coelho

ブラジル人作家のCoelhoの著作を読むのはこれが初めてで、正直名前もよく知らなかったのですが、ベストセラー作家なんですね。彼の著作は150ヶ国語に翻訳されているとか。でも、正直言って、参加しているブッククラブの「今月の本」に選ばれてなかったら実際に自分ではまず選ばないだろうなあという本でしたが、読んでみて正解でした。

ストーリーは、とある羊飼いの少年がピラミッドの側で宝物を見つける夢を見たことから始まります。夢が気になった少年は、ジプシーに相談に行き、そこで「おまえはピラミッド目指してエジプトまでその宝を探しに行くべきだ」と伝えます。そしてその後の少年の旅の様子が書かれるわけですが、もちろん途中で彼は色々な人と出会うことになります。

全体的なストーリーは、ある意味おとぎばなしのようなのですが、シンプルな文章の中に、はつとさせられるような意味が隠されていることが多々あります。個人個人が持っているというPersonal Legendとは何か。そして、それを見つけるためにはどうすれば良いのか。下手するとはたと本を置いて自分の人生についてじっくり考えてしまいそうな本です。とにかく奥が深い。

最後まで読んでみて初めてなるほど〜!!!と唸りたくなるようなエンディング。
我がブッククラブでは、この本の感想のディスカッションで大いに盛り上がりました!

ピアレス ゆかり

毎年ノーベル賞候補に挙げられるオウツですが、日本での知名度はいまいち？
詩、小説、評論、多岐にわたる活動を行っているうえ、多作家であるわりには「これ」という作品が日本では知られていないように思います。

わたしも何から読んでいつていいのやら決められず、謎(?)の作家でした。
YA本やホラーも多く、自分がこの種の作品が苦手ということもあります。
とりあえず、完結した作品で適当な長さの小説、ということでこの作品をチョイス。

筋書きは比較的単純で、裕福なユダヤ人作家でギリシャ文学の研究家である主人公が、貧しい家庭からきた類にタトゥーのある娘を偶然に助手兼家政婦に雇うこととなり・・・というところからストーリーは始まります。

淡々とした内容ですが、およそ対照的といつてよい二人にながら起こっていくか。ゴシックホラーの名手である作者は、微妙に不吉な影を匂わせつつストーリーを進めてゆきます。

ダイナミックな起伏はないのですが、不安感といったものが読者にページをめくらせます。達意の作家という気がします。ラストはえっ！？というのですが、周到に伏線が用意されており、納得。作者はこの小説を「スリラー」である、と語っていますが、確かに。

なぜノーベル賞候補となる名声を得ているのか、少しだけわかったような。静かに語るのになぜか人を強く惹きつける話し手っていますよね。単純な筋立てながら、知らず知らずに読者を作品世界に引っ張り込む力量に感心しました。

ただ、この作家は一筋縄では行かない、もっと色々な引き出しがあると思います。それを知りたいのですが、その第一歩として格好の作品ではなかったかと思います。

デンスケさん

※Sara Midda's South of France - A Sketchbook by Sara Midda

Sara Midda は日本でもファンの多いイラストレーターですが、この本は彼女が南仏を旅した時のスケッチや散文が盛りだくさん。既刊の「In and out of the garden」と同じような装丁になっているのが心地よい。カバーから本体、ページの隅々までどこを開いても楽しめるくらいデザインが考慮されていて、こういう本が本棚にあると、ウキウキしてしまう小さな芸術品だと思います。（アートにしてはお値段も手軽）

※When the Night Doth Meet the Noon (Poems by John Keats)

Keatsの詩は有名ですが、この本はKeatsが詩作した時代と同じ頃のロマン主義を中心とした画家たち、TurnerやConstableなどが描いた風景や人物（Keatsの肖像画もあります）と詩を見開きで鑑賞できるように構成された「文学・絵画館」のような本です。

※Wisdom, Madness and Folly by R. D. Laing

訳本では「わが半生」という、R. D. Laingが自身の半生を綴った

作品。人の心の絡まり（狂気）を詩のように描いた「結ばれ(Knots)」は常に読み返したくなるほどですが、それを生み出した彼の成育歴は？という疑問から大いに遅れ馳せで読んでみました。自分の中に自然に存在する狂気を無意識に語っているような、こんな自叙伝もあるのだ、と感じる作品です。